令和五年度入学試験問題（前期日程）

国　語

中等教育教員養成課程　中等教育プログラム　国語専攻

注意事項

1　解答はすべて別紙解答紙の指定の箇所に記入すること。

2　解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

令和５年度前期日程入学試験問題
問題訂正（２－１）

中等教育教員養成課程　中等教育プログラム　国語専攻

◎科目名　　国語

３ページ　問六　（書き下し文）

（誤）②　はづることなきをこれはずれば、・・・・

（正）②　はづることなきをこれはづれば、・・・・

１１ページ　〔三〕問題文　６行目

（誤）・・・泣き給ふこそ限りなし。・・・・

（正）・・・泣き給ふこと限りなし。・・・・

令和５年度前期日程入学試験問題
問題訂正（２－２）

中等教育教員養成課程　中等教育プログラム　国語専攻

◎科目名　　国語

１１ページ　〔三〕（注）６行目

（誤）○思ひにさし焼てむ・・・

（正）○思ひにさし焼きてむ・・・

解答するにあたっては、次のことに注意せよ。

ア　送り仮名・仮名遣い・文字・記号の表記については、標準的慣用表記によること。

イ　句読点は一字に数える。

ウ　楷書で書くこと。

〔一〕次のそれぞれの問いに答えよ。

問一　傍線部のカタカナの部分は漢字で、漢字の部分は読みをひらがなで記せ。

①　ヘイソクした状況に陥る　②　ジンダイな被害を受ける　③　仕事をナマける　④　糸がカラむ

⑤　神社にモウでる　⑥　イサギヨく非を認める　⑦　疑念を払拭する　⑧　運命に抗う

⑨　人格を陶冶する　⑩　資料を頒布する

問二　次の語句の意味として、最も適切なものを選択肢から一つずつ選び、記号で答えよ。

①　形骸　②　一瞥（いちべつ）　③　趨勢（すうせい）　④　均衡　⑤　庇護（ひご）

ア　ちらりと見ること　イ　見かけだけのもの　ウ　物事のなりゆき　エ　つり合うこと

オ　かばい守ること　カ　立派であること　キ　楽をすること　ク　慣れ親しむこと

問三　次の慣用句の意味として、最も適切なものを選択肢から一つずつ選び、記号で答えよ。

①　引導を渡す　　②　含む所がある　　③　火蓋を切る

ア　戦闘や競技を開始すること
イ　最終的な宣告をしてあきらめさせること
ウ　心のなかで不満や怒りなどを持っていること
エ　他人の言動にすぐに賛成すること
オ　地位や権勢のある人をうらやましく思うこと

問四　次の四字熟語の意味として、最も適切なものを選択肢から一つずつ選び、記号で答えよ。

①　画竜点睛（がりょうてんせい）　　②　片言隻句　　③　換骨奪胎

ア　物事を完成させるために、最後に加える大切な仕上げのこと
イ　うわべだけを飾った内容のない言葉のこと
ウ　表現や着想などを取り入れて、新たに作り出すこと
エ　物事を中断せずに、最後まで成し遂げてしまうこと
オ　ほんのちょっとした言葉や表現のこと

問五　次の歌は『新古今和歌集』に入集している歌（三一九番歌）である。これを読んで、以下の①②の問いに答えよ。

七夕の　衣の　つまは　心して　吹き（　）　返しそ　秋の初風

①　（　）の中に入る語を答えよ。

②　傍線部「つま」に用いられる修辞法を選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア　縁語　　イ　掛詞　　ウ　枕詞　　エ　体言止め　　オ　折句

問六　次の漢文の傍線部①②を波線部①②の書き下し文のように読むために、必要となる返り点の組み合わせとして、最も適切なものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

①　人不可以無恥。　②　無恥之恥、無恥矣。

（書き下し文）

①　ひとはもつてはづることなかるべからず。　②　はづることなきをこれはずれば、はぢなし。

ア　（二・一）　イ　（下・中・上）　ウ　（レ・レ）　エ　（レ・二・一レ）　オ　（二・一レ）

カ　（レ・レ・レ）

問七　次の①～⑤の各問いに答えよ。

① 次の文学作品の中から、『方丈記』成立より後に作られたものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア『源氏物語』　イ『枕草子』　ウ『万葉集』　エ『更級日記』　オ『徒然草』

② 次の文学作品の中から、井原西鶴の手によって作られたものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア『世間胸算用』　イ『国性爺合戦』　ウ『三冊子』　エ『雨月物語』　オ『浮世風呂』

③ 『無常といふ事』の著者として、最も適切なものを選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 北原白秋　イ 森鷗外　ウ 川端康成　エ 大江健三郎　オ 小林秀雄

④ 唐代の詩人を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 屈原　イ 昭明太子　ウ 王維　エ 陶淵明　オ 蘇軾　カ 王陽明

⑤ 「四書五経」に含まれない文献を次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア『孟子』　イ『詩経』　ウ『易経』　エ『墨子』　オ『論語』　カ『書経』

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「環境世界」の内部に跼蹐（注1）して生きる限り、われわれは一定の感覚的刺激に対して、それに応じた特徴的な反応行動をもって応ずるだけであろう。その段階では、当の体験を組織的に類別したり、それを他者に向って表現する必要には迫られない。だが、一たび「言語的世界」の中で生を営む次元に達するや、われわれは言葉の習得を通じて体験を整序分類し、単なる環境への〈反応〉に留まらず、それをA他者との関わり合いの中で言語的に〈表現〉する態勢へとわが身を馴化して行く。ここで言う〈表現〉は、高度に訓練された〈反応〉に還元することはできない。〈表現〉についてわれわれはその正否を問い評価を行うこと、つまり「表現についての表現」という形でメタ・コミュニケーションを行うことが可能なのであり、こうした〈表現〉の再帰的機能こそ、それを〈反応〉から截然と分かつ徴標にほかならない。先にも述べたように、言葉は環境世界における刺激―反応の分節をそのままなぞり、追認するわけではない。言葉の社会的習得のプロセスは、環境世界の分節構造を組み換え、再編成する過程にほかならない。いわば、社会的サンクション（注2）を伴った言語習得のプロセスは、環境世界に順応した生物的身体を言語活動の主体たる「社会的身体」へと構造化するのである。あるいは、われわれは言語習得を通じて「体験の分節方式」を共有し、そのことによって「間主観性（注3）」の次元へと身を開くのだと言ってもよい。

例えば、幼児が蚊に刺された皮膚を爪で掻きながらその不快感を「イタイ」と表現したとすれば、たちまち親から「カユイ」と訂正を受けることであろう。このような言語ゲームを通じての相互調整を経ることによって、われわれは社会的に公認された体験の分節方式を共有し、自らの体験を〈社会化〉して行くのである。それゆえ言語の習得を通じて、われわれは体験の整序分類体系とでも言うべきものを獲得する。各人の体験そのものは私秘的であるのに対し、この整序分類体験の方は公共的あるいは間主観的であることは言うまでもない。したがって、この言語的に整序された体験のことを〈経験〉と呼ぶとすれば、経験は私秘的な感覚的契機と公共的な言語的契機という二重性をもっているのである。すなわち、経験とは単なる私秘性の籬に閉ざされた、他者には窺い知られぬ内面的体験のことではない。それは言語表現を通じて本来的に他者へ向って開かれているのであり、この間主観的契機こそが、各人の体験表現の間に意味理解の「構造的対応性」を作り出しているのである。言いかえれば、言語はわれわれの体験に対して一種の「規整的ルール」として機能していると言うべきであろう。

むろん以上の議論だけでは、他者の体験表現の意味理解に有効な解答を与えたことにはならない。B体験表現の理解は、いずれ

にせよ私秘的な感覚的契機に基づいているし、また基づかねばならない、とする根強い偏見が残っているからである。しかし、われわれの戦略は、むしろ体験表現の理解を私秘的な体験の所有（立ち現われ）から切り離す所にある。そのためには、体験表現を私秘的体験を名指すものとしてではなく、あくまでも一つの「言語行為」として捉える視点が不可欠のものとなる。

再び幼児の例に戻るならば、言語習得以前の幼児は、痛みや痒みや寒さなどあらゆる不快感に対して、泣きわめき手足をばたつかせるという画一的な反応を行うことしか知らないであろう。それゆえ親は、お腹がすいてないか、おしめが汚れていないか、眠くはないか等々の可能な原因を推量し、その画一的な反応を分節化してやらねばならない。その場合、幼児はもちろん［Ⅰ］わけではなく、［Ⅱ］という実践的要求を行っているのである。その幼児がやがて言葉を習い覚え、自分の体験を分節化して表現することに習熟していったとしても、その場の事情は変わらない。すなわち、今度は言葉でもって、当の不快感を取り除いてくれるように、より明確に相手に向って実践的要求を行うことになるだろうからである。それゆえ体験表現は、基本的には他者へ向っての実践的要求の言語行為なのである。

他人の発する「私は……が痛い」という言葉を聞けば、私は相手の顔色や表情を見、傷があればその具合を調べ、薬を調達に走り、場合によっては医者や救急車を呼ぶといった一連の行為へと促される。むろん、一片の同情の言葉で済むこともあれば、知らぬ顔をきめ込むこともできよう。しかし、相手の体験表現の発言は、いずれにせよ私の具体的行為を誘発するのである。その場合、私が相手に向って「仲々見事な体験の描写をなさいましたね」と答えたとすれば、私は殴られるのがおちであろうし、さもなければ私はその発言の意味を理解していないのである。

それゆえ、他人の体験表現の意味を理解するとは、その表現によって相手が行っている言語行為、すなわち〈実践的要求〉に即応した〈実践的態度〉を具体的状況の中で私がとりうることにほかならない。クリプキ（注４）のウィトゲンシュタイン論の中の言葉を借りれば、「われわれは他人に痛みを認めるがゆえに同情するのではなく、他人に同情するがゆえに痛みを認める」のである。当然にも、C「痛い」、「痒い」、「寒い」、「憂鬱だ」等々の体験表現の分節化に伴って、聞き手の実践的態勢の方も多様な分節化を遂げていくことであろう。

ことは私が自分の体験を表現する場合でも変わりはない。私は自分が頭部に痛みを感じて「私は頭が痛い」と発言する時、別にその特徴的な感覚を名指し、相手に向って描写しているわけではない。私は相手に向ってその頭痛の解消を求める実践的要求（「薬が欲しい」、「医者を呼んでほしい」、「仕事を休ませてほしい」、「横にならせてほしい」等々）を行っているのであり、相手がそれに応じた実践的態勢をとってくれることを望んでいるのである。むろん「私は頭痛がする」と言って相手の勧誘や要請を婉曲に

断わることもあろうが（間接的言語行為）、その場合でも当の発言が実践的意味をもった一つの言語行為であることに変わりはない。したがって、ここには自分の発言と他人の発言との間に意味理解の〈非対称性〉は見られない。それぞれの体験表現に対する実践的態勢のとり方には、自分と他人の間に根本的差異は存在しないからである（むろん情深い人や冷酷な人といった個人的差異はあろうが、それは意味理解の基本線を揺るがすものではない）。

しかしながら、私秘的な感覚的体験は、それでは体験表現の理解に何の役割も果さないのであろうか。もちろん、幼児の感ずる不快感と泣き叫ぶ振舞いとの間に密接な結びつきがあるように、私の腹痛感覚と「私は腹が痛い」という発言との間には切り離せない関係が存する。しかし、それは自然史的結びつきとでも言うべきものであって、想定されているような意味論的結びつきではない。いわば、感覚的体験は体験表現の自然史的契機ではあっても、それを体験表現の意味（あるいは指示対象）と同一視することはできないのである。われわれは、言葉を具体的な実践的状況の中で学ぶ。体験表現の言葉だとて例外ではない。私は自分の感覚的体験を自然史的契機として体験表現の言葉を発し、それによって一つの実践的要求を行う。それゆえ、相手の体験表現の言葉を聞く時、私はそれが相手の感覚的体験を契機として発せられたものであることを知るであろう。むろん、私はそれがいかなる感覚的体験であるのかを知ることはできない。しかしながら、D具体的な実践的状況において私が理解すべきものは、相手の言語行為を通じて行われる実践的要求であって、相手のもつ私秘的感覚体験ではない。その限りにおいて、相手の私秘的感覚体験を知ることは、彼の体験表現の意味を理解することからは独立なのであり、別の事柄（しかも不可能な事柄）なのである。

確かに、私はしばしば自分の痛みになぞらえて他人の痛みを理解することであろう。同病相憐れむとの喩えもある通り、神経痛を患ったことのある人であれば、相手の神経痛の訴えに対して、より心のこもった実践的態勢をとりうることであろう。しかしそれは、体験表現の理解の深浅を左右するものではあっても、理解の正否を決定するものではない。逆に、もし体験の立ち現われが体験表現の理解に不可欠の条件だとすれば、神経痛を患ったことのない人は「神経痛の痛み」という表現の意味を理解できず、失恋の体験のない人は「失恋の悲しみ」という表現の意味を知らないことになろう。とすれば、われわれの理解力の及ぶ範囲は自己の体験の境域内に限られることになり、そもそも他人の体験描写である小説を理解することなどできなくなるはずである。問題は、理解と体験の立ち現われとを同一視する所にある。理解と体験との関係は等号で結びうるようなものではなく、いわば［Ⅲ］と挿絵、［Ⅳ］と彩色との関係になぞらえられるべきものである。すなわち挿絵や彩色は、理解を深めることには十分役立つけれども、それを欠いては理解が成立しないようなものではない。われわれが先に、「自然史的結びつき」と「意味論的結びつき」という対比を通して指摘したかったのも、正にこのことにほかならない。

（野家啓一「第四章　他我論「「対話的相互性」の地平」」（野家啓一編『哲学の迷路　大森哲学　批判と応答』所収、産業図書、一九八四）から引用した。設問の都合により本文の一部を改変している。）

（注１）跼蹐（きょくせき）…圧迫されて自由に行動できないこと。
（注２）サンクション…社会的規範からはずれた行為に対して加えられる制裁のこと。
（注３）間主観性…複数の主観の間で共通に成り立つこと。共同主観性。
（注４）クリプキ…アメリカの哲学者。オーストリア出身の哲学者であるウィトゲンシュタインについての研究を行った。

問一　傍線部Ａ「他者との関わり合いの中で言語的に〈表現〉する態勢へとわが身を馴化して行く」とは端的に述べるとどういうことか、本文中の表現を用いて、四〇字以内で説明せよ。

問二　傍線部Ｂ「体験表現の理解は、いずれにせよ私秘的な感覚的契機に基づいているし、また基づかねばならない、とする根強い偏見」について、本文中の他の表現を用いて「とする根強い偏見」に続くように三〇字以内で説明せよ。

問三　空欄Ⅰ・Ⅱに入る表現として最も適当なものを次の①～⑥の選択肢の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

空欄Ⅰ
① 自分の感じている不快感を描写している
② 自分の直面している不快感の原因を推量している
③ 自分が受けている不快感を理解している

空欄Ⅱ
④ その不快感を取り除いて欲しい
⑤ その不快感を理解して欲しい
⑥ その不快感を説明して欲しい

問四　傍線部C「「痛い」、「痒い」、「寒い」、「憂鬱だ」等々の体験表現の分節化に伴って、聞き手の実践的態勢の方も多様な分節化を遂げていくことであろう」について、具体例を挙げながら二〇〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部D「具体的な実践的状況において私が理解すべきものは、相手の言語行為を通じて行われる実践的要求であって、相手のもつ私秘的感覚体験ではない」について、そのように判断できる理由を本文に即して説明せよ。

問六　空欄Ⅲ・Ⅳに入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の①～③の選択肢の中から一つ選び、記号で答えよ。

①　Ⅲ　注　　Ⅳ　写真
②　Ⅲ　表紙　　Ⅳ　原色
③　Ⅲ　地の文　　Ⅳ　下絵

問七　本文の内容や表現の特徴についての説明として、適当なものを次の①～⑤の選択肢の中から二つ選び、記号で答えよ。解答の順序は問わない。

①　「環境世界」と「言語的世界」、あるいは「自然史的結びつき」と「意味論的結びつき」というように、対比的な意味を付与した表現を用いて、両者を比較しながら説明している。

②　「私は頭が痛い」という体験に基づく言語行為は、頭痛の解消という目的のために他者に実践的な要求を行うと同時に、相手に共感してもらうためにその状態を描写している。

③　「私は腹が痛い」という体験表現の言葉は、個人の感覚的体験を相手に対して描写する例として挙げられていると同時に、個人の体験が理解を深める例として強調されている。

④　一般的な意味でも用いられる「表現」「経験」といった語について、括弧（かっこ）をつけることによって一般的な意味から区別し、本文の文脈における意味を定義しながら説明している。

⑤　言葉の社会的習得のプロセスという抽象的な課題について説明する上で、幼児の言語使用についての具体例を挙げることで新しい話題に転換して議論を進めている。

〔三〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

中納言（殿、おとど）の妻北の方は、憎らしく思う継子落窪の姫君（女君、女、君）と、年老いた典薬助（典薬）とを逢わせようと計略をめぐらす。以下は、姫君の侍女あこぎが、典薬助が姫君を訪れる当日にそのことを知って、姫君に知らせに行こうとする場面である。

あこぎ、わびしきこと限りなし。北の方、殿の御台参るほどに、はひ寄りて打ちたたく。「誰そ」と言へば、「かうかうのことはべるなり。さる用意せさせ給ひて。御忌日となむ申しつる。いみじくこそはべれ。いかがせさせ給はむ」とえ言ひやらで立ちぬ。女君、聞くに胸つぶれて、さらにせむかたなし。さきざき思ひつること、物にもあらずおぼえて、わびしきに、逃げ隠るべきかたはなし。①いかでただ今死なむと思ひ入るに、胸痛ければ、押さへて、うつ伏し伏して、泣くことといみじ。

灯などともしてければ、おとどは夕まどひし給ひて臥し給ひぬ。北の方はかの典薬助のことにより、起きまして、部屋の戸引き開けて見給ふに、うつ伏し伏して、いみじく泣く。「いといたく病む。などかくはのたまふぞ」と言へば、「胸の痛くAはべれば」と息の下に言ふ。「あな、②いとほし。物の積かとも。典薬のぬし、医師なり。かいさぐらせ給へ」と言ふに、類なく憎し。「何か。風邪にこそはべらめ。医師いるべき心地しはべらず」と言へば、「さりとも胸はおそろしきものを」と言ふほどに、典薬さ渡れば、「こちいませ」と呼び給へば、③ふと寄りたり。「ここに胸病み給ふめり。物の積かと。かいさぐり、薬なども参らせ給へ」とて、④やがて預けて立ちぬれば、「医師なり。御病もふと止めB奉りてむ。今宵よりは一向にあひ頼み給へ」とて、胸かいさぐりて手触るれば、女⑤おどろおどろしう泣き惑へど、言ひ制すべき人もなし。こしらへかねて、せめて、わびしきままに、思ひて泣く泣く、「いと頼もしきことなれど、ただ今⑥さらに物なむおぼえぬ」といらふれば、「さや。などてか思すらむ。今は御代り

に翁こそ病まめ」とて、抱へてをり。北の方は典薬ありと思ひ頼みて、例のやうに錠などもさし固めで寝にけり。

あこぎ、典薬や入りぬらむと、惑ひ来て見るに、遣り戸、細めに開きたり。胸つぶるるものから、⑦うれしくて、引き開けて入りたれば、典薬かがまりをり。入りにけりと、心地もなくて、「『今日は御忌日』と申しつるものを、心憂くも入り給ひにけるかな」と言へば、「何か。近々しくもあらばこそあらめ、『御胸まじなへ』と、上の預け奉り給ひつなり」とて、まだ装束も解かでをり。

君はいといたう悩み給ふに添へて、泣き給ふこそ限りなし。あこぎ、取り分きて、などしも物をかくいみじくC思して、かかるは、⑧いかなるべきにかと思ひて、心細く悲し。「御焼石あてさせ給はむとや」と聞こゆれば、「よかなり」とのたまへば、あこぎ、典薬に、「ぬしをこそ今は頼みきこえめ。御焼石求めて奉り給へ。皆人も寝静まりて、あこぎが言はむに、よも取らせじ。これにてこそ志ありなし、見え始め給はめ」と言へば、典薬うち笑ひて、「さなり。残りの齢少なくとも、一すぢに頼み給はば、つかうまつらむ。⑨岩山をもと思へば、まして焼石はいとやすし、思ひにさし焼きてむ」と言へば、「同じくはとく」と責められてぞ、辞びけむやは。

（『落窪物語』より。設問の都合で本文の一部を改変している。）

（注）○御台……食事。○はひ寄りて……あこぎの動作。○かうかうのこと……典薬助が姫君の部屋にやって来ること。○さる用意せさせ給ひて……しかるべき準備をなさって下さい。○さきざき思ひつること……これまでに継母から受けた仕打ちを辛く思ったこと。○夕まどひ……夕方から眠くなること。○物の積……食いもたれ。○かいさぐらせ給へ……診断してもらいなさい。○一向に……ひたすらに。○思ひて泣く泣く……思いついて泣きながら。○近々しくもあらばこそあらめ……馴れ馴れしくしたのならともかく。○上の預け奉り給ひつなり……北の方が（姫君を私に）お預け申しなさったと聞いております。○焼石……体を温めるために用いる、綿や布でくるんだ焼いた石。○さなり……そのようだ。○思ひにさし焼てむ……私の姫君への思いの火で石を焼きましょう。

問一　二重傍線部「齢」の読みを、現代かな遣いのひらがなで答えよ。

問二　傍線部②「いとほし」、④「やがて」、⑤「おどろおどろしう」の本文中における意味を答えよ。

問三　波線部A「はべれ」、B「奉り」、C「思して」の敬語について、次の①、②を答えよ。

①誰から誰への敬意を表すか、次の中からそれぞれ選んで答えよ。

あこぎ　典薬助　姫君　北の方　中納言　作者（語り手）

②敬語の種類は何か、次の中からそれぞれ選んで記号で答えよ。

ア　尊敬語　イ　謙譲語　ウ　丁寧語

問四　傍線部①「いかでただ今死なむ」、③「ふと寄りたり」、⑨「岩山をもと思へば、まして焼石はいとやすし」を現代語訳せよ。

問五　傍線部⑥「さらに物なむおぼえぬ」を、例にならって品詞分解し、文法的に説明せよ。なお、用言については活用の種類も答え、助動詞については意味も答えること。

（例）　夜　／　ぞ　／　更け　／　に　／　ける

（解答）名詞　係助詞　動詞・カ行下二段・連用形　助動詞・完了・連用形　助動詞・過去・連体形

問六　傍線部⑦「うれしくて」とあこぎが感じたのはなぜか。本文に即して簡単に理由を説明せよ。

問七　傍線部⑧「いかなるべきにかと思ひて、心細く悲し」は誰の、どのようなことを心配している気持ちを述べたものか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア　姫君の、あこぎがこの後自分をどのように助けてくれるのかと、心配している気持ち。
イ　姫君の、典薬助の治療によって我が身がどうなってしまうのだろうかと、心配している気持ち。
ウ　あこぎの、典薬助の治療で本当に姫君の病が治るのだろうかと、心配している気持ち。
エ　あこぎの、この先の姫君の運命がどのようになってしまうのだろうかと、心配している気持ち。
オ　あこぎの、典薬助に疎んじられた自分の将来は危ういのではと、心配している気持ち。

問八　本文の内容についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　姫君は、あこぎが自分と話をするために部屋に来てくれて嬉しく思ったが、すぐに立ち去ったため寂しくなって泣いた。
イ　北の方は、苦しむ姫君の様子を見て風邪をひいたものと思い、診察を口実として典薬助を姫君の部屋に入れようとした。
ウ　典薬助は姫君に対し、今夜から自分が身代わりになって北の方からの仕打ちを受けるから、頼りにしてほしいと言った。
エ　姫君は、典薬助が部屋に入って来たときに、忌日であるからと言い訳して、典薬助に部屋から出て行くようお願いした。
オ　あこぎは典薬助に、焼石を持ってくれば姫君への熱意を示せると勧めることで、典薬助を部屋の外に追い出そうとした。

〔四〕 次の文章は、明の燕王（後の第三代皇帝永楽帝）が、甥である第二代皇帝建文帝に謀反を起こして首都南京を陥落させた直後に、建文帝の忠臣であった著名な学者方孝孺と対面した場面を記したものである。この文章を読んであとの問いに答えよ。

燕兵遂渡江、時六月乙卯也。帝憂懼。或勧帝他幸、図興復。孝孺力請守京城以待援兵、即事不済、当死社稷。乙丑、金川門啓、燕兵入、帝自焚。是日、孝孺被執下獄。先是、成祖発北平、姚広孝以孝孺為託、曰、「城下之日、彼必不降、幸勿殺之。殺孝孺、天下読書種子絶矣。」成祖頷之。至是欲使草詔。召至、悲慟声徹殿陛。成祖降榻労曰、「先生毋自苦、予欲法周公輔成王耳。」孝孺曰、「成王安在。」成祖曰、「彼自焚死。」孝孺曰、「何不立成王之子。」成祖曰、「国頼長君。」孝孺曰、「何不立成王之弟。」成祖曰、「此朕家事。」顧左

右授筆札、曰、「詔天下非先生草不可。」孝孺投筆於地、且哭且罵曰、

「死即死耳、詔不可草。」成祖怒、命磔諸市。孝孺慨然就死、作絶命詞曰、

天降乱離兮孰知其由、

奸臣得計兮謀国用猶。

忠臣発憤兮血涙交A、

以此殉君兮抑又何求。

嗚呼哀哉兮庶不我尤。

時年四十有六。

（『明史』方孝孺伝による。設問の都合により、返り点・送りがなを省略している部分がある。）

（注）○燕兵……永楽帝の軍隊。　○乙卯……（六月）三日。　○他幸……皇帝が他の土地に移動すること。　○社稷……国家。
○乙丑……（六月）十三日。　○金川門……南京の北にあった門。　○自焚……焼身自殺すること。　○成祖……燕王のこと。
○北平……北京。　○姚広孝……燕王の謀臣。　○詔……皇帝に即位することを天下に告げる詔。　○殿陛……宮殿の階段。
○榻……長椅子。　○周公輔成王……周公は、周公旦。周王朝の初代の王であった武王の弟。成王は、武王の子。周公旦は、武王の死後、幼い成王を補佐した。古来、聖人として尊崇された。　○長君……年長の君主。　○磔……刑の名、はりつけ。
○慨然……憤って気持ちが高ぶる様。　○乱離……戦乱で人々がばらばらになること。　○兮……助字。韻文などに使われて口調を整える。　○猶……はかりごと。謀略。　○尤……責める。とがめる。

問一　二重傍線部a・b・cのよみを送りがなも含めてすべてひらがなで記せ。

問二　波線部㋐・㋑のそれぞれについて、「即」のよみを送りがなも含めてすべてひらがなで記せ。また、波線部全体を現代日本語で解釈せよ。

問三　傍線部①を書き下し文にせよ。但し、「幸」は、「幸はくは」と読むこと。

問四　傍線部②について、「読書種子」とは何を意味しているか。次の(1)～(5)の中から最も適切なものを選んで記号で答えよ。

(1)　書籍の流通　(2)　学問の伝統　(3)　皇室の子孫　(4)　遺伝の法則　(5)　漢籍の分類

問五　傍線部③について、「周公」と「成王」がそれぞれ誰を喩えているか答えよ。また、傍線部を現代日本語で解釈せよ。

問六　傍線部④の書き下し文と現代日本語訳について、次の(1)～(5)の中からそれぞれ最も適切なものを選んで記号で答えよ。

（書き下し文）

(1)　天より下せし詔は先生に非ずんば草すべからざらん。

(2)　天に詔し非を下すは先生の草すること不可なればなり。

(3)　天下に先生の草するは不可なるに非ざるを詔せり。

(4)　天下に詔するは先生の草するに非ずんば不可なり。

(5)　天下の非を詔するも先生は可ならずと草されよ。

（現代日本語訳）

(1)　天に代わって先生が詔を書くことが和平の実現には必要である。

(2)　天より下された即位の詔は先生でなければ読むことはできない。

(3)　天下に下す即位の詔は先生が書いたものでなければだめである。

(4)　天下の人が非難しても先生がそれは間違いだと言うべきである。

(5)　天下に先生が詔を起草したことをだめだと非難する者はいない。

問七　傍線部⑤を書き下し文にせよ。

問八　空欄Aの中に入る漢字として最も適切なものを、次の(1)～(5)の中から選んで記号で答えよ。

(1)　下　(2)　噴　(3)　止　(4)　流　(5)　混